
~ 東方現想異聞録 ~ 【東方小説】

麻祁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～東方現想異聞録～ 【東方小説】

【Nコード】

N6735X

【作者名】

麻祁

【あらすじ】

夢を忘れし不遇な迷い子達よ。

行き場を失い、その不自由な体で何処を目指す？

吊す糸は生を操り ミチヲクルワス

傀儡師を失いし不遇なマリオットよ。

色彩を失い、その虚ろな瞳で何処を彷徨う？

途切れし糸は道を創り

イロヲアタエル

幻の世に不遇なし。

これぞ 遊惰の神隠し

ある一人の少女の朝

明け六どき。

暗く深い闇が支配する海に、一つの明かりが灯された。

灯る明かりは闇夜を切り裂き、じわじわと薄紫色の光を辺りに染み渡らせていく。瞬く間に広がる色に対し、闇は何も出来ず、全てが染まったその時には、もはやその姿はなかった。

甘酸っぱい葡萄のような柔らかな色が、一面を染める海。その匂いに誘われたのだろうか？

葡萄の海に、数匹の小鳥達が泳ぎを始めた。白き翼を大きく広げ、羽ばたく度に、辺りに美しい歌声を響かす。その声に、空は扇ぎ、色が揺れ、次第に海は澄み渡って行き、蒼海が世界を覆う。

毎日繰り返される変化。変わらない日々。そこに存在する者達はそれを合図に朝と言うモノを、毎日迎えていた。

そんな中、ある一室にいる少女は未だ夢の内にはいた。

窓から射し込む光さえも飲み込む、暗く閉め切った部屋。そこに広がる褐色の床には、数十枚にも及ぶ長方形の紙が無造作に散乱していた。散らばる紙のどれにも、大小様々な文字が書き綴られており、中には写真などが貼り付けられている物まである。

それに取り囲まれるようにして、部屋の真ん中には、小さな四つ角の机が居座っていた。色は白。机の上には床と同じくして、様々な物が散乱している。

手動巻のフィルム式コンパクトカメラが一台。

開かれた手持ちサイズの手帖が一冊。

『幻想郷の危機！？』と大きく文字が書き出された紙が一枚。折り曲げた自分の片腕を枕にし、すやすやと眠る少女が一人いた。

歳は数十前半、髪は黒のショートヘヤー。白の半シャツに黒のスカート。首に掛けられた赤の細いネクタイは解け、胸元から机へと

だらしく垂れている。右手には鉛筆が軽く握られ、ぐにやぐにやに歪んだ模様を紙に描いたまま、その場で立ち止まっていた。

部屋の左側にある丸窓からは、うつすらと暖かい太陽の日が射し込み、少女を更なる眠りへと誘

「！！？」

突如、少女が目を見開かせ顔を上げた。同時に机に直撃する膝。

「くっ！！？」

寝ぼけ眼の顔が、瞬時に歪む。

何が起きたのか？ そう理解する間もなく、少女の体はバランスを崩し、徐々に床へと引き寄せられていった。

慌ただしく両腕を伸ばし逆らう少女。 だが、時すで遅し。

「ゴフツ！？」

鈍く重たい音が部屋中に鳴り響き、仰向けに倒れた少女の口からは自然と声が漏れる。

「うつ……うつ……」

眉根を寄せ、まるで悪夢にでもうなされているかのような表情で、苦しそうな声を上げる。

膝の直撃を食らった机は、その衝撃により少しだけ揺れ動き、上に置かれていた物達は更に無残な光景へと姿を変えていた。右端に置かれていたコンパクトカメラは仰向けに倒れ、文字の書かれていた紙には、大きな一本の線が新たに書き加えられていた。横たわる鉛筆の先端には黒鉛が砕け散り、左端に追いつめられた手帖はゆらゆらと揺れ動き 落ちる。

部屋に鳴く、小さく乾いた音。落ちたその衝撃により、手帖が開かれ、あるページが開かれた。

ページの右側には、写真が一枚。写り出されているのは、学生服を着た二人の男女。一人の男は右側に立ち、かなり慌てた様子でこちらを見ている。髪は癖のある黒のセミショート。

その男の左側には、銀髪のロングヘヤーの女が立っていた。女は目を細め、睨み付けるようにして、こちらを見ている。そして、写

真の左 ページの左側には、ミミズが這った様な汚い字でこう書かれていた。

月 日 ノ刻、

竹林にて、現在問題とされる二人の人間と接触。

右：男、氏名 久柳 龍麻

左：女、氏名 麻祁 式

が映り出される。闇は空を隠し、光を拒む。そのおかげか、この場所
は昼間でも妙に薄暗く、竹林の間を駆け巡る風がやけに肌寒く感
じる。時たま闇から聞こえるざわめきは、しばらくすると声を止ま
し、今度はしつとりとした静けさだけが俺の体を包み込み始める。
息の絶える静寂、まるで止まっている。この場所は そんな感覚
で満ちている。

「ふう……」

俺は確かめるようにして深く息を吐き、再び辺りを見渡した。

いつ見ても薄暗く、やはり奥が見えない。本当に……、見つかる
のだろうか……？

「犬だと？」

「ああ、そうだ」

俺の言葉に麻裱が頷いた。

未だ太陽の光が燦々と照りつける昼前。俺達二人は、竹林の前に
いた。

目の前にそびえるは城壁のような竹。横にずらりと生え並び、そ
れはどこまでも果てしなく、終わりが見えない。背中には、今歩い
てきた畦道が一本だけ走り、 それ以外には何もなかった。田ん
ぼを進めばその先は竹林。少し違和感を感じる風景だ。

「しかし、何でまた犬なんか……」

「この近くにある村長からの依頼だ。この竹林内ではある時期にな
るとタケノコが生えてな。村人以外にも色々な所から人が来ては、
タケノコを取って行くそうだ」

「んで、犬は？」

「今から話す」

胸元で腕を重ね、麻裱は少し間を空けてから口を開いた。

「ここ数日間、竹林に入った者 全てが行方不明となっている」

「迷子か？」

「 だったら、楽なんだがな……」

軽く両手を広げ小さくため息をついた後、目を細め、麻裯が竹林を睨み付けた。

「事はそう単純な話じゃなかった。実は行方不明者と言っても、誰一人戻らなかつた、って訳じゃないんだ。行方不明者の中にも、普通に村に戻ってきた者もいた」

「それじゃ、ただの遭難になるな。俺達の出る幕じゃない」

「ああ、普通の遭難ならば……な」

「ん？」

「話はそう単純じゃないと言っただろ？ 近くの村ではある習わしがあつてな。もしこの竹林で遭難者が出た場合、捜索隊は出さない事になっているんだ」

「!?!? それじゃ、竹林での行方不明者は……」

「……ほとんどが見殺しだろうな。ただ、捜索隊を出さない理由もある。一つは以前、捜索隊を出した時に、捜索隊の全員が行方不明になった」

「ミイラ取りがミイラか」

「とんだ笑い話だろ？ まあ、行方不明になった数十人の内、数人は帰ってきたって話なんだが、それ以来警戒してな。ミイラを増やさない為にも出さなくなつたって訳だ。そして、二つ目が遭難者の有無だ」

「うむ？」

「つまり、行方不明者が遭難したかどうかの認識だな。こればかりは本人から確認などはとれない。二人以上で入り、運良く戻ってきた一人に話を聞く以外にな」

「なるほど……、だから俺達に犬を……」

「そう言う事だ。私達が探すのは人ではなく、犬。行方不明になつたのはその村の村長が飼っている犬だ。よほど愛犬家なのか、捜索隊まで動かそうとしぐらいだからな」

「俺達の安否はどうでもいいってのかよ……」

なんとも身勝手な話だ。俺は大きく息を吐き、麻裯に目をやった。

「他人より犬。泣けてくる話だろ」

麻祢はそう言いながら歩き出し、目の前に生えている竹に何かをや
り始めた。右手がしきりに動いている。

「ああ、泣いたぜ俺は、久しぶりにな」

「私もだよ……。よし」

終わったのだろうか。声と共に麻祢は右手を止め、俺の方に振り
返った。

「以上が依頼内容と経緯だ。それと、もう一つ面白い情報がある」

「まだあるのか？」

「竹林から遭難し帰ってきた人達なんだが……、結構いろんな人が
いてな。何割かの人は自分が遭難した事に気付いてない人もいた」

「そりゃ分からないだろうな。まさか自分が、迷った！？　なんて
考える人は少ないからな」

「……もしその人が数週間迷っていたとしたら？」

「数週間……？　さすがにそれは……」

「分からなかったんだよ。自分が迷った　おろか日数や時間さえ
もな」

その言葉に、俺は小首を傾げた。

俺達には常何時、手元に時計が無くとも、時間や日数が分かるよ
うになっている。これがあるからこそ、今の時間と言うモノがハッ
キリしてると言っても過言ではない。そう、　太陽と月がある限
り。

「一週間遭難して、戻ってきた人がいたのか？」

「正確には一ヶ月、そして一日と半時間」

「一日と半時間？」

「一日と半時間と言うのは、そいつの感じた時間感覚らしい」

「どう言う意味だ？」

「ん、簡単な話だ。実際そいつは一ヶ月も家を留守にしたのに、
俺は一日しか家を空けてないと言うんだ。当然、カレンダーは一日
以上経っている」

「なら、その人の勘違いでは？」

「最初は皆そう思ってた相手にしてなかったんだが、少し奇妙な物が見つかってな」

「奇妙な物？」

「果物だ」

「果物？」

「ああ、バナナやリンゴなど木に生えている物だよ」

「……それは分かっているよ。その果物がどうしたんだよ」

「腐ってなかったんだよ」

「腐っていない？ 食べたとかじゃなくて？」

「丸々一つだ。どこも欠けてはないし、かじった様子もない、新鮮その物。まさに、一ヶ月も放置してた果物には見えなかったそうだ」

「有り得ないな……」

「竹林で食べようとして、袋に入れたまま持ち歩いていたらしい。」

本人の証言では、もちろん家から持ち出した時と同じ状態だと。それと、巫女を見たと言っている」

「みこ？ あの神社とかにいる巫女か？」

「その巫女だろうな。どうやら、巫女に案内されて村にたどり着いたらしい。この証言については、遭難した数人が発言している」

「巫女……、一体何が……」

「他にも色々な証言がある」

「例えば？」

「金髪の少女に出会い質問に答えた瞬間、喰われそうになった。竹林を抜けると奇妙な人里に出た。その人里では人間以外に妖怪などがある。薄暗い森に入る手前に奇妙な雑貨屋があり、ほとんどが非売品。など。どれも信憑性が薄い。」

「遭難者全員がそう？」

「いや、最初にも言ったが、何人かは竹林からすぐに出てきてな。」

そう言った体験をしてない人もいた。そう発言しているのは、竹林に入ってから大体一週間以上は遭難してる人達からだ。それに、そ

の証言には、一致する部分もあれば、バラバラな部分もある。ただ一つの証言を覗いて」

「ただ一つ？」

「この竹林で遭難してから一週間経つ人から、すぐ出てきた人まで、全ての人がこう証言している。あの竹林を歩いていると一匹の動物と出会った」

その言葉を聞いた瞬間、

「それは……」

俺の心は一瞬にして……、

「ピンク色のウサギだ」

呆気を取られたのだった。

関係性

竹林。

行方不明。

不可思議な発言。

時間感覚のズレ。

ピンク色のウサギ。

繋がりがそうで繋がらない糸。考えれば考えるほど、途切れては繋がりと、頭の中で同じ事が繰り返えされ、グルグルと絡みつき解けない。

ただ一つ分かった事と言えば、この場所には時間と言う感覚が存在しない。それだけだ。まだ一本の糸にするには程遠い。しかし、全ての不可思議な現象の原因はウサギにあるのではないかと俺は思う。

全ての人が証言するピンク色ウサギ。絶対的に関係性は無いとは言いつけないだろう。ウサギを捕まえさえすれば、複雑に絡みついた糸も一本になるかも知れない。

しかし、この雰囲気……。あまりの暗さと静けさに、他の生物が生きているとは思えない。もう一度入れと脅されても、二度と入りたくない場所の一つに入るな……。

俺は睨むようにして、竹林の奥を凝視した。目に映るは、竹、竹、竹、闇。やはり、見えないものだ。これではウサギ所か、犬すら見つけられない……。改めて俺は、この依頼の大変さを痛感させられた。

少々骨の折れる依頼……。しかし、誰かを殺すような依頼よりは十分マシだと俺は思う。現に、今でもあまりそう言った依頼は受諾しなかったものの、その現場を目の当たりにして、いい気になど、とてもなれるもんじゃなかった。

やはり、多少面倒なりとも、俺にはこちらの方が気が楽だとつくづく思う。どこぞの誰かさんは無表情ながらも、間違いなく面倒くさがるだろうが……。

ふと浮かび上がる麻祁の顔。その表情は、眉間にしわを寄せ、明らかに嫌そうな顔をしている。……そう言えば、麻祁はどうしているのか。

竹林に入った後、俺達は二手に別れ、目標を探す事にした。二人で同じ場所を探すより、一人一人が別の場所を探した方が効率的に良いからだ。

しかし、入って分かったが、この暗さでの単独行動はかえって危険過ぎる。まさしく、ミイラ取りがミイラに……。

笑えない冗談だ。ここは早く合流した方が良いな……。

俺はいち早く麻祁と合流する為、捜す事にした。

まずはどこから……。

行き先を決めようと辺りを見渡していた、その時だ。

「!!!？」

突然、雷鳴のような轟音が俺の耳に届いた。その衝撃音は凄まじく、上で揺らぐ闇が一気に騒ぎ立つ。

この音は……。それを理解した瞬間、体中に流れる血液と筋肉が一気に引き締まり、緊張が走った。すぐさま俺は、ベルトに備え付けていたホルスターからハンドガンを抜き、弾薬を確認した。

アイツの事だ。何かある時は即座に引き金を引く。特に、自分の身が危険に晒された時に……。

装填している弾薬を確認後、俺は上部のスライドを引いた。重々しく引かれたスライドは、何かガマまったような掠れた音を鳴らし、いつでも撃てる体勢に入る。グリップを握り締めた俺は、その場から動かず、腰をかがめ辺りを見渡した。

今、何かと一緒に麻祁も動いているはず……。目標も分からずに歩くのは危険過ぎる。アイツが撃っている間は……。腰をかがめたまま、辺りに耳を澄ませる。

一体何処から……。

目を閉じ、ある一つの音に集中する。しかし、葉のざわめきが耳元で騒ぎ、それ以外には何も聞こえては来なかった。やむなくその場から移動する為に一度辺りを警戒し、腰を上げる。

次の瞬間、

「つ！！？」

前方から鳴り響く轟音と共に、風切りの音が俺の横を勢い良く通り過ぎて行った。あまりにも一瞬の出来事と辺りの薄暗さに、何が通り過ぎて行ったのかは分からない。

一体何が……。

通り過ぎた何かを確認する為、振り返ろうとしたその時、ふと後方から、奇妙な音が耳に入ってきた。パキ、パキと、それはまるで小枝をへし折るような……。

へし……折る……。悪い予感が頭の中をよぎる。

恐る恐る振り返った先、

「なっ！！？」

その光景を目にした瞬間、俺の思考が停止した。

緑にしなる幹。ゆらゆらと揺れ動いては、小枝の折れるような悲鳴を上げ、ゆっくりと俺の方に向かって倒れ込んでくる。胴体に大穴を空けて。

「つちよ！ ま、待って！」

そんな制止の言葉なんぞ聞き入れる様子もない竹は、俺との距離を徐々に詰めていく。俺はすかさず足に力を入れ、体ごと右に飛び込んだ。

迫り来る地面。鈍く小さな音が上がり、体に痛みが走る。同時に大きな悲鳴と共に、地面に激しく葉が叩き付けられた。その音は一瞬で止み、竹林にまた静けさが戻る。

「つ……、何なんだよ……」

ズキズキと痛む体を起こし、地面に座ったまま、自分の足元を確認した。

視界に映ったのは、静かに横たわる竹がいつ。目が自然と見開かれる。それは突如として、俺の視界に飛び込んできた。

倒れた竹を飛び越え、俺の事なんぞ目向きもせず、そいつらは風のように通り過ぎる。

あれはなんだ？ それを理解するまでに、そう時間は掛からなかった。

後ろから聞こえてくる地面を蹴る音が、次第に遠退いていく。頭に残る疑問を後にし、俺はすぐさま立ち上がった。

とにかく追わなきゃ、麻祁とあの兎を……。

体に付いた土を軽く払い、二人の後を追った。

見えない背中

「はあ、はあ、はあ、はあ
どれぐらい走ったのか。」

薄暗い竹をかき分け、ひたすら前に突き進むも、未だに俺は、麻
祁の背中に追いつけないでいた。それ所か、一度も背中を見ていな
いと言う始末。いつしか耳に入り込んでいた葉の音も、今では自分
の息づかいへと姿を変え、うるさく耳元で響く。

「はあ、はあ、はあ、はあ」
前方に生えている竹が、次々と俺の横を過ぎ去って行く。これで
何本目になるのだろうか……。

同じ姿に同じ場所。何歩進もうが、変わる事のない景色。まるで
その空間だけ切り取られ、無限にその場所を走り廻っている。そん
な感覚がしてならない。

速度を緩める事なく、俺は前方に広がる竹林に向かって目を凝ら
した。……やはり、人影らしいモノは見えて来ない。

今、麻祁は全速力であの兎を追いかけているはず……。いや、そ
んな事は十分に分っている。ただ俺がその速度を上回れるかどうか
それが問題なのだ。麻祁が立ち止まっていれば、話は早いのだが……。

俺は一度も呼吸のバランスを崩す事なく、走り続けた。

だが、しかし……、麻祁の背中に追い付く事が出来ない焦りから
か、先ほどから呼吸は少しずつ乱れ始め、噴き出す汗が体中にべと
つき始めていた。

足には熱が籠もりだし、一歩踏みしめる度悲鳴が上げ、響くよう
にして痛みが全体に広がっていく。

麻祁は一体どこへ……。

心に募り広がり始める不安感。そして、ある一つの考えが浮かび

上がった時、突然足に足かせが掛けられた。

もしかすると麻祁は、俺の知らないどこかで道を曲がったのかも。

「はあ、はあ、はあ、くっ……」

一気に重みの増す足元。意志に反し、熱と痛みが更に広がっていく。知らず知らずのうち速度は落ちて行き、そして……、俺は足を止めた。

立ち止まるなり両膝に手を置き、肩の力を落とす。額から頬へと滴り落ちる汗が地面へと溶け込んでいく。俺は深くゆっくりと何度も深呼吸を繰り返し、確実に酸素を肺へと送り込んだ。

「ハア……、ハア……」

呼吸と鼓動音が、次第に落ち着き始め、徐々にあのリズムを取り戻していく。滴り落ちる汗も、今では頬で止まり、それ以上落ちる事はなかった。少しずつ戻りいく体調。あと少しすれば、また走れる……。

闇でせせら笑う葉。竹林の間から吹く風が、背中を押し、汗を拭っていく。最後に俺は、その場の全てを飲み込む勢い良いで、大きく息を吸い、ゆっくりと吐き出した。

よし。

踏み込む右足。次の瞬間、

ッ!?

ある音が俺の足を止めた。一気に騒ぎ立つ葉。そこに流れる空気を全て打ち崩し、その音だけが耳元を染めた。あの轟音が。

音はすぐさま反響し、四方八方に散らばる。

俺は何一つ迷う事なく走り出した。それは確かに聞こえた。すぐ近く、前。

風に背を押され、竹林の間を縫うように走り抜ける。そして遂に……、俺の目に、その背中が映り出された。

合わない距離

なびく銀髪。無数に生える竹林に紛れ、一人の女が立っていた。その姿を見るなり俺は、声を張り上げ名前を叫んだ。

「麻祁ッ！」

竹林に響く声。その声に反応し、女が振り返る。

揺れる長髪。正面を向いた紺の制服が闇から妙に目立つ。間違いないあの姿。麻祁だ。俺は少し速度を上げ、麻祁の前で立ち止まった。

「はあ、はあ、あさ……ぎ……」

少し走ったせいかわ、言葉が途切れては上手く喋れず、小さく肩で何度も息を繰り返す。その姿を、じつと無表情のまま見詰める麻祁。胸元で腕を組み、やる気のなさそうに立っている。

「や、やっと見つけたぞ……はあ、はあ……」

「何をだ？」

「い、いや……、お前と……うさ……」

不意に蘇ってくる記憶。すぐさま、辺りを見回す。しかし、いくら見回せど、その場所にそいつの姿はなかった。当然、麻祁の近くにも居らず、周りは竹林と闇で塞がれている。まさか、逃がしたとか……。

「麻祁、あの兎は……？」

「兎？ ああ、それならもう居ない」

「遣ったのか？」

「誰が？ 逃げたんだよ。行き先は 不明だ」

ふつとため息をつき、呆れた様子で麻祁が少しだけ両腕を広げる。

「しかし、なぜ私が兎を追いかけていると？ どこでみ……」

「額に風穴が空きかけた……」

「……」

その言葉に麻祢は黙り込み、睨むように俺の顔を見てきた。

「それは危なかったな、　　ツチ」

小さな舌打ちを鳴らし、麻祢が背を向ける。

なぜ舌打ちを……。

そんな複雑な俺の心境なんぞ後目に、麻祢が言葉を続ける。

「しかし、逃したのは痛かった」

「兎か？」

「ああ、あと少しだったんだがな……」

そう言いながら、麻祢が竹林に目を向けた。その顔は相変わらずの無表情だ。

しかし、見詰める瞳は真っ直ぐと闇を見据え、更にその先を見通していた。まるで、すでに何かを捉えている。そんな雰囲気を感じる。もしかしたら、すでに何かを掴んだのか……。俺はあの時しまい込んでいた疑問を、麻祢に問い掛けてみた。

「麻祢　あの兎は……」

「例の兎だ」

「やはり……。だが、あれは　　」

竹林で多発的に起きた遭難事件。全ての遭難者が証言する、ピンクの兎。俺があの時一瞬見た兎は、確かにピンクの兎だった。

しかし……。その兎は俺が思い描いていた兎とは、大きくかけ離れていたモノだった。

真っ直ぐ頭からのびはねた白の兎耳。

全体的にウエーブの掛かった髪。

白のペチコートが入ったピンク色のワンピース。

服と同じピンク色をした靴。

人。

背丈は小さく、小学生ぐらいの身長に見えた。麻祢に追われ、必死に逃げるあの表情が今も脳裏に焼き付いている。

「兎の着ぐるみを被っていたのか。はたまた、人が更なる進化の果てにそうなったのか……」

麻祁が俺の方へと振り向く。

「何が何であれ、奴がこの竹林での遭難事件に関わりがある事には間違いない」

真つ直ぐとした瞳で俺の目をじっと見詰める。その瞳からは、確信という言葉が読み取れた。

「今は退くぞ。後日準備を整えてから、再度、兎を含む犬の捜索に入る」

「ああ……」

麻祁の言葉に、俺は小さく返事した。現在位置の分からないままの今、捜索の続行は自殺行為を意味する。麻祁の言う通り、ここは一度、退いた方が身のためだろう。

「そうだな、大分奥まで来たみたいだし……」

「何？」

麻祁の表情が一気に変わった。

「な、なんだよ」

「……龍麻。確か私達を最初に見たのは、あの倒れた竹の所からだよね？」

「ああ、お前が撃ち抜いたあの竹からだ……」

「その後、どれぐらい歩いた？」

「どれぐらい……って、距離は分からないな。ただ、かなりの距離は走った」

「数メートル」

ふと呟かれた麻祁の言葉。

「たかが数メートル以内、自分の走った距離すら、分からないのか？」

「は、はあ……？」

その言葉に、俺の頭は混乱した。

麻祁は何を言ってるんだ？ たかが数メートルだと？ それは俺の体験した事実とは、大きく異なる言葉だった。

俺は麻祁を追いかけ、竹林を数メートル……。いや、数十メートル

ル以上は確かに走った。それは、俺の記憶違いではなく、しつかりと体を覚えている。絶対に気のせいなどではない。

「な、何を言ってるんだ。俺はお前の後を追いかけて走ったんだぞ！ ほら！」

よれよれの半袖ワイシャツ。汗で湿り、微かに土の付いている袖を麻祁に見せる。

「それは分かっている。だが、私はあの竹を通り過ぎた後、数十メートルも走ってないんだよ。私自身がだ」
「なっ！？」

噛み合わない距離感。それは完全に俺の体験を、ひっくり返す。だが、麻祁が嘘を言ってるとは思えない。

「おいおいおいおい、どうなっているんだ……」

「私が数メートル以内。龍麻が数メートル以上。同じ直線上の距離を走って、全く違う距離感を持つ。つまり……」

「……！！？」

麻祁に言われ、初めて俺は気付かされた。今自分達に起きている状況、今置かれている立場。そして、最も最悪な言葉を。

「そう……なん」

ぐるぐると周りを取り囲む竹林。過ぎていく風、揺れる葉。先の見えない闇が上から辺りを包み込み、俺達二人を嘲笑っていた。

道

「　　った、またかよ……」

俺は肩の力を落とし、膝の上に両手を置いた。横にいる麻祢は、無表情のまま胸元で腕を組み、静かに前を見据える。これで、七回目だ。

俺達の目の前に、一本の竹が倒れていた。太い緑の幹に、覆い茂る葉。倒れた衝撃により、地面の土は微かにえぐれ、辺り緑の葉を散らす。あの竹で間違いないだろう。

「もうこれで七回目だぞ」

「そうだな」

素っ気ない返事を返す麻祢。その返事から察する通り、どこか一人慌てた様子もなく、いつも通りの対応だ。

あまりにも不可思議で、常識では考えられないこの状況下、それなのにこの態度……。長く一緒にいるとは言え、時折見せるその変わった言動には、多々驚かされる時がある。

麻祢曰わく　人は獣のほど優れてはいない。進化の過程で他の生物より衰えているんだ。考えなきゃ生きられない生物なんだよ

との事、……本当に何か考えているのか？

「そうだな　　って、次はどうするんだよ」

「歩く」

「はあ!？」

「ここで立ち止まっている訳にも行かないだろ？」

「　　ツチ、んで、次はどこから行くんだ？　右か？　前か？　それとも左か？」

「後ろだ」

そっ一言呟き、麻祢が道を引き返し始める。

「　　ったく……」

俺は肩を上げ、小さなため息と共に背中を追った。

「これで八本目、後は全てあの場所に戻る。……戻ったらどうするんだ？」

「……」

俺の問い掛けに、返ってくる無言。まあ、いつもの事だが……。それよりも、この状況をどうしたもののか。

現在、俺達の手元には地図やコンパスなどはなく、当然、案内板といった道筋を示してくれる物なんて、絶望的じゃない。……否定したいが、これを遭難以外になんとも言えるのか。

俺は辺りを見渡した。変わりない姿。奥は暗けれど、その先の景色なんて容易に想像がつく。せめて何か目印さえあれば……。

再度見渡したその時だ。

「あっ」

ある物が目に入り、口から思わず声もれた。突然の事に不意をつかれ、俺の足は立ち止まり、それを凝視する。その姿に麻裱が気付いたのか、こちらに向かって歩いてきた。

「……どうした？」

「い、いやさ……」

声と共に突き出す指。それに釣られるように、麻裱が指差す先に目を向ける。

「……！！？」

表情に険しさが増した。

「……龍麻」

睨むように俺の横顔見つめ、続け様に口を開く。

「だから何だ？」

「ああ……」

「はあ？」

曖昧な返答に、麻裱が更に眉を寄せる。

「い、いや、何でも……なかった」

「……まったく、意味が分からない。幻なら自分の世界だけにしてく

れ

呆れた声でそう言い残し、麻祁が歩き出した。

幻なら……か。

麻祁がそう言うのも当然だった。俺が指差し、麻祁が見た物とは何もなかったのだ。

ただ暗闇を、ただ竹を。どこを向けば、嫌と言うほど目に入る同じ景色。それを麻祁は見たのだ。だから、麻祁と同じ物を見た俺の返す言葉は、必然的に曖昧なものになってしまう。だが……、俺は確かに見た。麻祁が見る前の、俺が指差すその前から　あの屋敷を……。

木と瓦で覆われた門構え。遠くから見ただけだが、どこか衰えた様子もなく、立派な姿で立ちはだかっているその姿からは未だ人が住んでいる気配は見て取れた。それを見た瞬間、俺の中である一つの可能性が、新たに生まれ出した。誰か住んでいるのでは？

もしその可能性が確かなものになれば、そこに住んでいる人から話を聞き出し、ここから抜け出す為の糸口を掴めるかもしれない。例え、中に居る人が、俺達と同じ遭難者だったり、……最悪の場合、空き家だったとしても、少なからず何かの情報は得られるはずだ。この絶望とも呼べる状況下で、突然現れた僅かな可能性。行ってみる価値は大いにあった……のだが、それを確かめる事は、もはや出来なかった。消えたのだ、それは溶けるようにして……。

竹林を見渡し、ふと偶然にも屋敷の門を見つけた俺は、声を上げ、近付いて来た麻祁にその場所を指差した。がその方向へ振り向くと……、そこには既に何もなかった。

この間、俺は門を直視していた。ただ前を向き、決して門から目を逸らす事なくだ。しかし、今考えると、そんな中でも、たった一瞬だけ門を視界から消した時があった。　瞬きだ。

それは本の僅かな一瞬の暗闇。その時に、門は消えた。だが、信じられるだろうか？　高が数秒にも満たない、たった数コマ以下の時間。その間に、あの門が消える……。当然、それは有り得ない

話になる。つまり、あの門は俺の見た幻覚で、綺麗に説明がつくのだ。だが、もし誰かが意図的に消したとしたら？

……俺自身、あれを幻覚と言う一つの言葉で流したくはない。しかし、この場の雰囲気と麻祁の言葉により、それはさらに拍車が掛けられ、もはや内心では、そうではないか？ と変わって来ている。……本当にそうなのだろうか？

「おい！ 何をしているんだ！ 置いていくぞ！」

「……！？ ああ……」

遠くから聞こえた麻祁の声に、俺はふと我に返り、後を追った。今は何も無い闇を惜しみながら。

希望の水泡

「ああ……、ダメか……」

突きつけられた現実に失望し、俺は肩を力を落とした。

結果は、何となく想像出来てはいたが……。

ふと視線を右手に落とす。そこには、一台の折りたたみ式携帯。

まさかな……。それは数分前の話になる。

途方もなく竹林内を彷徨う中、俺は、自分のポケットに眠っている携帯の存在に気付き、すぐさま電波状態を確認した。

これを使えば助けが……！

……だが、そんな思いとは裏腹に、期待と描かれた文字は、水泡の如く弾け飛んで行く事になったのだった。あの忌々しき文字により……。

黒く沈む外装に、不気味に光る緑のサブディスプレイ。そしてそこには、圏外と書かれた文字が堂々と居座っていた。

「はあ……」

ふと漏れ出すため息を携帯に絡ませ、渋々とポケットに戻す。

携帯については、麻祁とはまだ何も話してをしてはいない。……

言った所で結果は、目に見えているからだ。それによくよく考えると、場所が場所だった。こうも簡単に連絡がつけられるなら、苦勞もしないか……。

「はあ……」

何かを考えれば考えるほど、口からは、もはや、ため息以外には何も出て来ないでいた。

……どうせ、いくら脱出する為の案を考えようが、全て水泡に終わる。

そんな思いが徐々に広がりを見せ、諦めの文字がちらほらと浮かび始めた時、ふと俺の中で、ある一つの疑問が浮かび上がってきた。

そういえば 彼の遭難者はどうやって、ここから抜け出したの
だろうか？

見れば分かる様に、この場所には出口に向かって優しく案内をして
くれる板や、そこに向かう為の道標など、ありはしない。さらには
道と呼べるような道などもなく、あるとすれば、無数にも生え並
ぶ竹とそれらを包み込む闇。そして、俺達の上で嫌らしくも、葉の
隙間から見せつけてくる、ほんの微かな光だけだ。

そう、ここは方角と時間の存在しない場所。そんな方向感覚や時
間感覚など、人の感受性が狂わされた暗闇の中で、一体どうやって
抜け出したと言うんだ……？ もし、この場所が絶対的に脱出不可
の迷路だとすれば、遭難者は見つかる事はなく、抜け出したと言う
前例は現れない。

つまり前例がある以上、必ずどこかに、抜け出す為の道があると
言う事だ。だが、それが一体どこに……。

再び目の前に立ち塞がった大きな壁。それは苦しくも同じ物。
またも立ち往生を余儀なくされ、仕方なく記憶の中を流れ行く単
語の渦を手探りで彷徨い歩く。

……竹林、光、うさ……。

その時だ。ふとある一つの単語に通りがかった時、俺の足が立ち
止まった。

前例。

そうだ、前例だ。

確か、麻祁がここに入る前に、遭難者の話をしていた。もしかす
ると、ヒントに繋がる何かが見つかるかも知れない。

その話を詳しく聞く為に、俺は目の前を歩いている麻祁に声を掛
けた。

「なあ、麻祁」

「……」

無言。振り返る様子や、立ち止まる気配などもなく、相変わらず
の無言で返事を返して来る。その見慣れた対応に、俺は気に掛ける

事もなく話を続けた。

「ここに入る前に話していた、遭難者の事なんだが……、もう少しくわし……」

「この場所についてか？」

「……ああ」

俺の声から数秒間の沈黙後、麻祁が口を開いた。

「竹林で迷った遭難者の証言によると、この場所から抜け出すには二通りの方法しかないらしい。一つは歩いて抜け出すか、そしてもう一つが、少女に案内されるか　だ」

「少女？　あの巫女の事か？」

「いや違う。それは抜け出した後の話だ。竹林内では、巫女ではなく、銀髪の少女に出会ったと話していたらしい」

「その子が案内してくれたと？」

「ああ、……ただ出会った場所までは分からない。なんせ周りは竹ばかりだからな。それ以外には何も無いよ」

「……姿は？」

「トップスの白シャツに、赤のもんぺ、それにサスペンダーが付いて、頭には髪飾りのリボン。それと長髪に散りばめられた赤リボンと白リボンが数個以上だ」

「……奇抜だな」

「だからこそ覚えていられる。ある意味救われたな」

「他に情報は？」

「後は下らないものばかりだ。その少女は竹炭を集めるとか、自衛団だとか、健康マニアの焼き鳥屋。どうでも良い話だ。……そう言えば、もう一つ面白い話がある」

「ん？」

「この場所で、大層ご立派な格式の高そうな御屋敷を見た、と言う人がいたらしい」

「屋敷……って、まさか……」

「まさか？　　って、おい」

何かを思い出したのか、突然麻祁が立ち止まった。

「……………あの時か？」

振り返らない言葉だけの問いに、俺は小さな声を返す。

その答えに、何かを考えているのだろうか？ 無言のまま立ち止まり、動かない。数秒後、何事もなく再び歩き出し、俺も足を進める。

「……………屋敷については、ほんの僅かな者だけしか見ていない。割合的にも十に……………いや、十二、三人に一人。それぐらいだ」

「やけに少ないな」

「ああ、だから私達はそれらの情報の原因は、迷った事で起きるストレス障害の副産物として扱う事にした」

「だから幻覚……………」

「そう。ピンクのウサギ及び、竹林内、外で接触した銀髪の少女と巫女、それらの証言が百に対し、屋敷は一か二、更には、この場所の雰囲気も合わせれば、見えない事もない」

「それじゃ俺が見たのも？」

「……………分からない」

麻祁が声を落とした。

「私が見た限り、あの時龍麻は、幻を見ているような様子ではなかった」

「それじゃ……………」

「違う」

「はっ？」

「まだ先走るな。確かに、幻など見てはいないだろう。だが、それはあくまで 私から見た形。現に私は見てはいないのだからな」

「つまり、麻祁自身がその屋敷を見るまでは、どっちだ、とは言い切れないと？」

「そうだ。可能性は可能性だがな」

「それじゃ、もし、その屋敷があるとしたならば？」

「なぜ私には見えなかったんだ？」

「誰かが消したとか……」

「何の為に？ 意図は？ どうやって？」

「ぐっ……、そ、そこまで知っている訳がないだろ！」

「ハアッ！」

質問責めに対し、俺が答えられないと分かっていたのだろう。麻
祁があざ笑うに、一瞬だけ声を張り上げた。

「どうせそう言うだろうと思っていたよ。龍麻に分かる事なら、私
には既に分かりきっている事だからな」

「……っ、うるさいな……」

「……まあしかし、そう言いたい所も山々だが……。残念な事に、
私にも分からないんだよ。何故この場所で迷っているか？ あの兎
は何なのか？ 屋敷は？ どうやってここから抜け出せるのか？

…… 本当に分からない事だらけだ」

「…… もう少し確かな情報でもあればいいのにな」

「ああ、全くだ。不確かな情報こそ、当てに出来ないものはない。
が、今はそれに縋り付くしかないのが事実。いるかもどうかも分
からない、銀髪の少女とやらを見つけなければ話が進まないなんて、
本当に情け無いはな……ん？」

話しの最中、突然麻祁が立ち止まり、辺りを見渡し始めた。

一体なんだろうか？

麻祁に合わせ、俺も立ち止まり、その奇妙な行動を見守る。しば
らく辺りに視線を散らばせた後、何も無かったのか、麻祁が俺の方
に振り返り、顔を見てきた。

「……」

視線をそらさずに、無表情で見つめてくる。

「な、なんだよ」

「……」

無言。会話も無く、見つめてくる目を見返す事、数秒後。麻祁
が目をそらし、上を見上げた。それに釣られ、俺も同じく自分の頭
上を見上げる。

闇が揺らぐ空。相変わらず葉が嘲笑い、俺達を見下し　顔。

「なツガツ!？」

石と石をぶつけ合ったような鈍い音が辺りに鳴り響くと同時、頭の中を激しい鈍痛が駆け巡った。その衝撃は凄まじく、俺はすぐさま頭を下げ、両手でこめかみを押さえた。

「くうおおおー!!」

痛みだけが思考を支配し、鈍痛が鐘のような音で頭の中を鳴り響かす。口元からは自然と声が溢れ、視界が一瞬にして渗んだ。

「くああアツー!　何なんだ急にツ!」

「……………」

その光景を長々と無言で見ていた麻祁が、ふと呆れた表情で、小さくため息をついた。俺は目元から滲む涙を手で拭い、熱く痛む額を片手で強く押さえ、辺りを見渡した。

…………… 一体何処へ？

麻祁に釣られ、見上げた闇から、突然俺の額へと目掛け、落ちて来た何か。ほんの僅かな一瞬の間だったが、もし俺の見間違いでなければあれは……………。

人。

だが、辺りを見渡すも、麻祁以外には誰も居らず、相変わらずの景色だった。

いない……………？

「足下」

ふと眩かれた麻祁の声。俺は麻祁に言われた通りに、自分の足下を確認した。

「……………えっ?」

それを目にした瞬間、俺の中で響く鐘と痛みが、全て吹き飛んだ。少し湿った土、未だ青々しい竹の葉が所々に覆い被さるその上に、幼き少女が一人、倒れていたのだ。

少女

髪は金色。肩まで伸びた、柔らかく膨らむセミロングには小さな紅色のリボンが結ばれており、上着である白のブラウスには赤のネクタイが絞められ、その両端をチェリー色をした二つの球体が挟み込んでいる。

ブラウスの上から着込んでいる黒のベストと同色のロングスカートは、今、俺達を包み込んでいる闇を連想させる。歳は十代前半。身長からして、小学生ぐらいなのは確かだ。しかしなぜ……。

俺は上を見上げ、少女が落ちてきた場所を凝視した。葉音を鳴らし、ゆらゆらと揺れる闇。何一つ変わっていない。

どうなっているんだ……。俺は再び少女に顔を向け、その場にしやがみこんだ。

少女は目を瞑り、倒れたまま動く気配がない。前髪の間隙から覗く額には赤みがかかり、少し腫れ上がっている。俺は耳元にまで顔を近づけ、呼び掛けてみた。反応 なし。

次に、片手を少女の口元にまで寄せ、呼吸を確かめた。先ほどの衝撃で気絶しているのか、それとも……。

頭の中で最悪の事態を想定するも、内心で頑なにそれを拒否する。口元で手を広げ数秒後、微かながらも、生暖かい風を感じる事が出来た。

「……はあ〜」

心が一瞬にして安堵に浸り、俺の口から思わずため息が溢れ出した。

どうやら……、最悪の事態は逃れたようだ。だが、このまま安堵に浸る訳にはいかないな。

俺はすぐさま、少女の頭を右手で抱きかかえ、左腕に両足を乗せた。

軽い脳震盪かも知れない。しかし、詳しい検査もなく決めつけだ

けの判断は危険すぎる。ここは一刻も早く医者に……。

余計な振動を頭に与えないように注意を払い、少女をしつかりと胸元に抱き上げ、ゆっくりと立ち上がった。抱いた両手にほのかな温もりと重たさが、全身に伝わる。

俺は改めて少女の位置を確認し、麻祁に目をやった。

一人自分の頭上を見上げる麻祁。落ちてきた少女なんぞに一切構う事なく、闇とのにらめっこをし続けている。

「お……い」

声を掛けようとした矢先、突然麻祁が頭を下げ、こちらを見てきた。

「どうだ何か分かったか？」

俺の言葉に麻祁がふとため息を漏らし、

「いや、さっぱり。それより……」

顎で胸元に抱いた少女を指して来た。

「ああ、軽い脳震盪のようだ。今は気絶している。

ただ、見た

目の判断だから、一応医者に連れて行かないと」

「……そうか」

そう一言呟いた後、麻祁は何も言わず振り返り、そのまま闇に向かって歩き始めた。俺は遅れまいと、麻祁に合わせ、足を踏み出す。その時だ。

「……ん？」

突然、妙な違和感が俺の足を止めた。

グツと背中に掛かる重圧。まるで、何かに押されているような……。

ミラレテイル？

「ッ！？」

俺はすぐさま振り返った。しかし……、当然の如く、そんな眼はどこにも居らず、辺りを見渡し、上を見上げてても闇と竹ばかり。気のせい……か？

そう考えるも、どうも気になり、何度か確かめて見た、が、やは

り何も見えては来ない。

……これも幻覚のせいなのか？

俺は頭を数回振るい、歩き出した。

薄気味悪い場所だ。

緑と黒と影

少女を抱きかかえ、暗い竹林に映りだされた麻禰の背中を見続け歩く事、数十分。未だに、あの竹は見えてこないでいた。

その微かながらも、変わりつつある状況の変化に気付いた俺は、内心焦る気持ちを抑え、麻禰との距離を保ち続けた。かれこれ歩き続けて数十メートル……。もし、この先にあの竹が居るならば、俺達はずでに感動的な再会を果たしていなければならぬ。それが見られない今、確かに違う所に向かって歩いてる。後は、このまま何も無く外に続いていけばいいのだが……。

「……と」

突然ある物が目に入り、俺は足を止めた。

視界の先に見える紺の制服。さっきまで歩いていたはずの麻禰が、立ち止まっていた。

何かあったのだろうか？俺は詳しく状況を聞くために麻禰に声を掛けた。

「どうし……」

「静かにしろ。……誰かいる」

「えっ？」

呆気に取られる俺をよそに、麻禰が何も言わず、前に向かって指を突き出してきた。それに合わせ、麻禰の指差した先へと目を向ける。

「……！！？」

それを見た瞬間、俺は自分の目を疑ってしまった。

視界に広がる緑と黒。それら全てを打ち消すかのように、ぼんやりと灯された明かりの中に、二つの影が立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6735x/>

～東方現想異聞録～【東方小説】

2012年1月6日06時45分発行